



# 消えた街角：富岡畦草・記録の目シリーズ 昭和三十九年昭和も遠くなりにつけり

近年日比谷公園は公園本来の姿、休息の場としてサラリーマンで賑わっている。平和の証しであろうか。明治中頃この地は、練兵場として使われる原っぱであったが、明治三十六年(一九〇三)わが国初の洋風庭園として造成。さまざまな国家的行事に使われ今日に至った。現在の形は、城の石垣や心字池も備える和洋折衷であるが、手頃な広さと飲食店もあるパンスの良さから広く親しみ活用されている。私も昭和二十五年(一九五〇)以来の霞が関勤務期間、昼休みによく出掛けた。園内のレストラン松本楼は、開園以来の歴史に関わり、根強いファンを持つている。それにして、この六十年間の樹木の成長は見事で、戦後を思うと感慨深い。

この写真は霞が関の帰途、西の霞門から入って東の有楽門へ抜け、日比谷交差点でのスナップである。すでに珍しくなっていたトシビオパーの老人を目に止め記録した。

正面に見える大きなビルは、日活国際会館である。日活とは日本活動写真を縮めた名称であるが、戦後二十年くらいは映画の全盛時代で余力をいろいろな事業に活かした。日活も昭和二十七年三月、この国際会館を建設、昭和二十九年(一九五四)には江の島水族館も開設して評判をとった。特にこのビルは、建設を請け負った竹中工務店が特殊潜水法を用いたことで、大いに注目を浴びた。この方法は、江戸時代まで日比谷入江と呼ばれた東京湾奥の浅海埋立地という土地条件に対応しての取組みで、私も通勤帰途よく覗き見した。

これと向かい合った交差点右側の建物は帝国生命、のちの朝日生命である。昭和四年(一九二九)の竣工で、昭和五十九年(一九八四)に建替えられた。さらに右には、やはり関東大震災後の建築で、同年に完成した三信ビルがある。その階アーケードの美しさで大いに親しまれた建物であるが、保存運動もむなしく平成七年に取壊された。

振り返ってみると、せつなく戦後に残った日比谷有楽町周辺のビルは取壊されて、もはや昭和を偲ぶ縁は無い。つい二年前には日活国際会館も、五十五年で生命を終えた。(撮影 昭和三十九年二月十二日)

文 富岡畦草(とみおか けいそう)  
大正15年8月、三重県生まれ 日本写真協会、日本写真家協会、自然科学写真協会などの会員



(富岡畦草撮影 平成21年3月26日)

今回は、晴海通りと日比谷通りの交差点脇から定点撮影を行った。この周辺は「鹿鳴館」や「東京倶楽部」などの西洋式ホテルや社交倶楽部があった場所。それを受け継いでいるのか、高級外資系ホテル「ザ・ペニンシュラ東京」が2007年9月にオープンした。正面に見えるこのホテルは、地下4階地上24階、314室もの部屋数を持つ。この地にまた一つ、名所となる高級ホテルが加わった。(文:渡辺邦博)

